

『浮世物語』論

——教訓の物語化——

高野昌彦

はじめに

浅井了意の著とされる『浮世物語』（寛文五年（一六六五）頃刊^①）でこれまで問題となつて来たのは、主人公である浮世房の人物造型についてである。それは、巻一、二の滑稽卑小な人物像と、巻三から巻五の御伽衆となつて教訓を語る人物への変容を、小説構成上破綻していると見るか、それとも破綻ではないとするかに分かれる。それぞれに研究が積み重ねられているが、それらは、今日の小説的観点から見ても破綻しているとするか、作者了意の意図を鑑みて矛盾なしとするかという所に立脚している。しかし、浮世房の造型が破綻しているかどうかを問う事自体にはあまり意味がない。それよりは、なぜ破綻と取れるような造型を為すに至つたかを考察すべきである。

『浮世物語』は、教訓を素材とし、これに主人公を設定する事で物語化しようとしたものである。右の問題もこの過程で生じたものであるが、この教訓の物語化に『浮世物語』の評価すべき点があると考え論じて行く。

一

『浮世物語』は、同じく了意の作品である『可笑記評判』（万治三年（一六六〇）刊^③）と共通する話が非常に多い。先行研究においても『浮世物語』と『可笑記評判』との関係は指摘されている。それは花田富二夫氏の「仮名草子 評・注の文学——『可笑記評判』を中心に——^④」においてである。また谷脇理史氏は、『浮世物語』と『可笑記』との関連を指摘されている^⑤。

したがって、まずそれらを対照表にして示す。左の表で（ ）と

した『可笑記評判』の段は花田氏の指摘に拠るものである。また傍線を付したものは谷脇氏の指摘（谷脇氏の指摘は『可笑記』だが『可笑記評判』の章段で表記）である。それ以外は筆者の調査の結果である。

右の表は『可笑記評判』と内容やテーマが共通したものを全て挙げた。両書の共通した段は、『浮世物語』全五十二段の内、過半数の三十一段に及ぶ。両書で語句が一致した箇所も十二段において見られたが、どちらかもう意が執筆したためと考えれば内容が共通するのは当然であり、典拠とまでは言えないと判断した。

一例として、花田・谷脇両氏が挙げられている『浮世物語』巻二―九「後悔の事」と『可笑記評判』巻一―三「物ごと、後悔すべき

事」を見ると、『浮世物語』では、

網にかかりしし鳥は高く飛ばざることを悔み、鉤をのみける魚は餌を忍びざることを悔むといへる。

とあり、『可笑記評判』では、

後悔の体をたとへていはゞ、羅網の鳥の、たかく、とばざることを、なげき、呑鉤の魚の、餌を忍ばざることを、かなしむがごとしとかや

と、同様の文言が述べられており、また司馬温公の「六悔の銘」や井上小左衛門の『悔草』（正保四年（一六四七）^⑥）に触れている。

そして『浮世物語』では、これに続けて巻二―十「人に癖ある事」、同十一「賢人の事付狂泉を飲みし事」とあるが、これは『可

浮世物語	可笑記評判
1-2	7-21
1-3	10-29
1-4	3-3, 9-17, 10-29
1-5	1-21, (6-6)
1-7	(5-3), 5-4
1-8	8-9
1-10	1-17, 4-24
2-4	2-1
2-9	(1-3)
2-10	(9-14)
2-11	(9-15)
3-2	(3-16), 9-8, 9-18, 9-19
3-4	(2-15)
3-5	3-21
3-6	4-13
3-7	4-12
3-8	7-7
3-9	(10-32)
3-10	4-3
3-11	3-14
4-1	1-12, 10-26
4-4	2-14, 8-6, 8-7
4-5	9-29
4-6	9-38
4-7	3-12
5-2	1-27, (9-1)
5-4	7-21
5-5	4-3
5-6	9-35

『笑記評判』でも卷九—十四「人に癖ある事」、同十五「賢は賢をもつて、求めよといふ事」と共通した内容が続いている。このような、語句の一致は見られないまでも内容の共通した段が十五段あった。

右に挙げたのは両書の内容の共通性が高いものである。これに対し、内容の共通性は薄いが、発端となるテーマが同様のものがある。

『浮世物語』卷三—七「雁鴨の稲をくらふ難儀の事」と『可笑記評判』卷四—十二「鷹の餌に狗をころしける事」を挙げる。

『浮世物語』では、「御鷹狩もいにしへより三国にわたりてある事なれば、とどめられよと申すにはあらず。」としながら、

今の鷹狩・鹿狩は、只なぐさみのため、遊びのためにして、田ともいはず島ともいはず、鳥をだにとりぬれば、踏み倒し推しふせて田畠をそこなふ事、百姓のためには、いくばく恨めしからん。

と、百姓を苦しめる鷹狩を批判している。これが『可笑記評判』では、

鷹狩の事は、上代よりこのかた、異国本朝おなしく、これありといへども、さしも情なき殺生はつゝしむべき物をや

と、鷹の餌としてむやみに犬を殺す事を批判している。つまり、双方ともに鷹狩を基にしながら、一方は百姓を苦しめる実態を批判し、他方は無益な殺生を禁じる論へと展開しているのである。このよう

な段は四段あった。

このように、『浮世物語』は『可笑記評判』と多くの段において内容やテーマが共通している。したがって本稿では、典拠とは言えないまでも、『浮世物語』の構想において、了意の意識下には『可笑記評判』があったと考える。

また右に見られた話題は、了意以外の仮名草子作者によって書かれた作品にも見られるものである。例えば、井上小左衛門の『悔草』にも親子の問題や婦人の三従についての段、また博打や遊女に関する段がある。博打の例を挙げれば、上巻の三十五段で、

或は、勝負わざも、折節は。わづかの物を、取やりて。一時のあそびは、よし。然れとも。おごりやすく。やめがたし。さらでや。意地は、しられて。人々に嘲られ。かつ人は稀にして。まくる人のみおほし。

と、人々に嘲られ、負ける事が多いと博打を諷めている。

そして、後節で比較するが、山岡元隣の『他我身のうへ』（明暦三年（一六五七））においても博打見物や廓通いに異見する段が見られる。このように、博打や廓通いを諷める話は当時の教訓的仮名草子が必ず触れる話題だったと言える。

このように『浮世物語』の題材は、当時の教訓的仮名草子と共通した題材を多く取っているのである。

前節で、『浮世物語』と『可笑記評判』や他の教訓的仮名草子の話題の共通性を確認した。『浮世物語』がこれらの仮名草子と比較して異なっているのは、浮世房という主人公が設定されている点である。本稿は、教訓的な題材を、主人公を設定する事で物語性を持たせたところに、『浮世物語』の文学史上評価すべき点があると考える。

したがって、まず浮世房の人物像がどのように形成されたかを確認する。先行研究により、浮世房は『竹齋』^⑧の主人公竹齋の影響を受けていると指摘されている^⑨。確かに京を離れる際にまず京参りを行う点や、藪医者となつて失敗する点に共通性が見られる。

『竹齋』では、「その身貧にして病者さらに近付かず。所詮諸国を廻り、いづくにも心の留まらん所に住まばや」と京を離れる決意をするが、「先づ〱京内参りを仕らん」と京参りをしている。

これは『浮世物語』も同様で、出家した浮世房は、「京の住居もなりがたし。諸国修行と心ざし」て、「さらば、都の住居京をかぎりの思ひ出に、京うちまいりをせばや」と京参りをする。

また、『竹齋』では、名古屋に着いて様々に藪医者ぶりを発揮するが、『浮世物語』においても巻二二「葉ちがひをせし事」とい

う巻がある。ここで浮世房は、坊主を止めて医者になるが、

何は知らず粉薬をあたへたるに、飲むよりはやく吐逆して、病人、氣をとりうしなひ反返りければ、浮世坊肝を消し、閑道より逃げて、足にまかせて落ち行きけり。

と失敗して終わっている。『竹齋』と同一の内容ではないが、藪医師竹齋を意識して描かれた段であると考えられる。

このように浮世房の行動には先行する『竹齋』の影響が見られる。ここから、浮世房の人物像は竹齋と同様に滑稽で卑小なものに造型されたと言える。

但し、浮世房は先行する『竹齋』の影響を受けたばかりではない。それは、当時の啓蒙教訓的風潮を捉えて造型されている。

『浮世物語』巻一「浮世坊なりたちの事」を見ると、

しかれども胎毒ふかき子なりければ、頭には甲瘡といふもの、
鉢かづきのごとくになりて、目の際までただれしほどに、
尼

子・佐竹の瀉薬をあたへて、ほどなく癒へにけり。只疳の虫・癖の病ありとて瘦せつかれたるを、赤蝦・八目鰻、色くあたへて養性いたしければ、思ひの外に疱・疹かる〱といたしけり。風門・筋違に灸をしたれば、鬼のごとくすくやかになれり。

(略)

^② かくて年をかさぬるほどに、親は身まかりぬ。これより身持わ

がままになりて、足を空になし、小鳥をおとし、魚をつりて、
ここかしこ遊びさまよふ浮かれ者と成りにけり。

と描かれる。これは『可笑記評判』巻七―二二「子を生立る心得の
事」の了意の評判に、

(2) 年月をかさぬるほどに、漸々に悪党になり、後には、いよく
我がま、をいたし、喧嘩ずき、博奕うち、傾城ぐるひの、野猫
になる、これ、親の、かはゆがりすぎる、あやまち也(略)

あるひは、又、その子、おさなき時、胎毒にせめられ、丹毒の
瘡生じ、疔気、癬の病あるを、様々療治して、平癒して、すくや
かに、成人すれども、その親、猶も、いたはりすごし、職もつ
けず、芸もつけず、精かつくる、気が虚する、などいふうちに、
をのづから、ふせう者になり、少の事にも退屈がり、大呻して、
宵寝まどひ、朝ふせり、昼寝かちなる、物くさ太郎になり、
何ぞ、をのれが数寄の事には、日を重ね、夜をこめても、苦に
ならず、色をこのみ、酒に染て、ほしるま、なれ共、親はもと
より、氣のよはき者なりとて、いさめ、異見はせずして。

とあるものと共通している。四角で囲った「鉢かづき」と「物くさ
太郎」は言うまでもなく御伽草子作品であり、対応させたと考える
事ができる。

『可笑記評判』では、親が育て方を誤つて「悪党」になつたり、

幼い時に「胎毒」にかつたため不精者の「物くさ太郎」になる事
が言説として説かれている。

これが『浮世物語』では、主人公である浮世房の、成長していく
実際の過程の中に取り入れられている点が異なる。

また別の例を挙げると、『浮世物語』巻一―三「博奕の事」で浮
世房は博奕をし失敗する。

(浮世房、筆者注) 博奕打ちの溢れ者につきあひて、もみ糞・
重・迦鳥の立てもの、銭の中に銀をまじへ、銀の下に金をしき
つつ、⁽¹⁾立ててはとられ、積みてはとられ、夜ごとに寄り合ひて
打つほどに、負くる事がぎりなし。⁽²⁾後には叱り博奕になり、喧
嘩まなこになりつつ赤面しける有りさま、世にある人はすまじ
き事なり。見ぐるしさ、いふばかりなし。

ここは先にも引いた『可笑記評判』巻十一―二九「武芸勤べき事付
博奕八法の事」と共通している。

物のたとへにさへ、すりきり見くるしき風情を見ては、古ぼく
ちうちか、と、いひあへり、たとひ、当座のなぐさみに、する、
と、いへども、勝負を、あらしむ、つらを、あかめたるも、見
にくし、⁽²⁾其上、や、もすれば、いはれまじきこと業を、あやま
り、喧嘩をしいだし、身をあやまる、第一、不奉公のなかだ
ち、万事、用所かくる、と、心得へし

評曰(略)

次に、博奕八法の事、第七にあたる盜窃より前後七の不義は、生ずる也、仮初の手あそびにも、侍たるもの、すべき事には、あらざる也長阿含經に、博奕に六の失を、とかれたり、一には、財産日に耗とて、博奕をうつものは、負るは、もとよりの事也、勝と思へども、商人、職人、百姓までも、それ／＼の役義に、をこたり、つるには、財宝耗て、まづしくなる(以下略)

右に引いた(1)、(2)の箇所に共通性が見られ、『可笑記評判』で説かれた博奕で身を持ち崩す見苦しい姿を、『浮世物語』の浮世房が実践している。つまり『浮世物語』の当初の目的は、当時扱われた教訓を、失敗によって実践してみせる所にあつたのだろう。

このように浮世房に実践者としての役割が与えられている事については、松原秀江氏が『浮世物語』論―浮世と人の心とのかかわりについて^⑧で、

「浮きに浮いてなぐさみ」生きることをよしとする考え方の体現者として、この物語の主人公浮世房は、先ず登場してくるはずである。

と述べている。

確かに浮世房は体現者ではあるが、重要なのは失敗する点である。

なぜなら、先に見たように、構想の中に竹齋の滑稽卑小な人物があつたからである。

また、先に挙げた「他我身のうへ」にも、浮世房に先行した人物が登場する。『浮世物語』における浮世房のような一貫した主人公は存在しないが、博打や廓通いを諫められる人物が登場する段がある。

『他我身のうへ』巻二―「博奕の見物附瓜島の事、賢者ぶりの事」では、「ある福人の子、博奕をこのみて、あけくれ打しに、其従者つよくいさめ申侍りしかば、(以下略)」とある。ここでは「福人の子」は見物しているだけだと言ひ訳するだけで終わるが、『浮世物語』で浮世房が宿老に諫められる段に先行した話だと言えよう。また『他我身のうへ』巻三―「けいせいぐるひいけんの事」では、庄屋が息子に外の世界を知らせようと知り合ひに相談する。そこで廓通いを紹介されるが、

日夜に傾城ぐるひを、しならはせけるほどに、はやとりなりもよくなりて、うすき小袖の一つまへ、しめぬる帯もり、しくて、こうたさみせん立すがた、云ものごしもいろありて、花時鳥月雪の、うつりかはれる折々の、あつきさむさの指合も、人にあふての取あはせ、ふるなのべんともいひつべし、

と、通う際の出で立ちが描かれる。これは『浮世物語』巻一―六

「傾城ぐるひ異見の事」でも、浮世房の廓に通う出で立ちがさらに詳細に描かれている。

興じて後は、人目をもつつまず、袖のなり大そぎにそぎて、襷高く引きまはし、幅の広き帯うしろに結び、たたき鞆の中脇指、金鐔をざらめかし、畝刺しの踏皮にぼたんを入れ、席駄をならして出立ちける有りさま、月代は耳のもとまで剃り下げ、鬢うすく鬚くひそらし、菌柄の大編笠目深に引きこみたれば、そのなりふり、良しとやいはん、悪ししとやいはん、殿中風のただなかなり。

右に挙げた共通性から、『浮世物語』が先行する『他我身のうへ』から博打や廓通いで身を持ち崩す浮世房の発想を得た事は十分考えられる。つまり了意は、先行する『竹齋』や『他我身のうへ』から発想を得て滑稽卑小な浮世房を創出したと考えられる。この浮世房の失敗行動による教訓の物語化が、『浮世物語』の評価すべき点だと考える。

三

先に、『浮世物語』の評価すべき点が、浮世房の失敗行動による教訓の物語化にあると論じた。先行研究で問題とされて来たのは、このような失敗を繰り返す滑稽卑小な人物であった浮世房が、卷三

以降では御伽衆となり、一転して教訓を説く側に回る点である。

しかし、浮世房の人物像の破綻の有無を論じる事にあまり意味はない。見解によりどちらとも取れる性質のものである。それよりはむしろ、このような破綻と取れる構成に至った原因を究明する事が重要である。したがって、浮世房の変質について、その理由を考察してみたい。

まず『浮世物語』卷三二「侍の善悪批判」を見てみる。初めに侍が浮世房に対し、「御房の有様、何とやらん鼻の先うぞやき、身のふるまひも瓢金さうに見ゆ。かまへて万事たしなみ給へ」と挑発的な発言をする。そしてこの侍の発言に対し、浮世房は「出家ばかりに、かぎらず、侍も」と反論し、

今ほど世間にて、『あの人**は**万事へつらひなく無欲なる賢人かな』とほむる、その人柄を見れば、大方みな礼義をも知らず、よろづふつつかなる緩怠をいたし、きはめて人前に慮外をはたらき、わが言ひたきままに物言ひちらし、人を何とも思はぬあぶれ者なり。

とやり返す。この浮世房の発言は、『可笑記評判』卷九一十八「表裡格別の人の事」に、

今時、世間にて、あの人**は**、万事へつらひなき、と、ほめらるゝ人、見聞に、みな慮外くはんたいをも、しらぬ、あふれも

の共の、不礼を、はたらく人なり

とあるものと共通したものである。

このような『可笑記評判』と共通した教訓を述べる浮世房は、確かに以前の人物像とは異なる。他にも巻三では浮世房が武士を批判した段が多く見られる。巻三―三「小謡を忘れたる事付武道ぶたしなみなる事」で浮世房は、

主君につかへて軽薄をいたし、表裡をかまへて追従らしく、心立て胴欲に欲ふかく、嘘をつき、常は荒言はきちらし、(以下略)

と武士を批判するが、これも『可笑記評判』巻九―十九「侍の善悪を見知事」の、

利はつめきて、軽薄表裏ある人は、もとこれ、邪欲のわたくしより、いたすゆへに、心ざし、まこと、すくなく、恩をわすれ、情をしらず、

とある了意の批評と共通している。

右に見る武士批判は、『可笑記評判』の了意の批評にしばしば見られるものであり、了意には武士を批判しようとする意図もあったのだろう。但し、この了意の批判が、『浮世物語』では浮世房の口から語られているのである。この事により、浮世房は主人公としての存在を保つ事ができたと言える。つまり、浮世房を語る側に回ら

せたのは、浮世房を主人公として保持するためであったのである。

事実、浮世房の人物像を保とうと苦心した跡が巻二―四「米の値段高き事付穀象虫の事」に見られる。この段で浮世房は、米問屋の門に立ち「鄭穀夫が詩」を唱える。浮世房はこの詩を解説する形で米問屋を批判する。

粒々珠璣を蔵すとは、その倉に入れ置かるる米は、直談ことの外に高くて、米の粒ごと、みな珠を積み上げたるがごとし。一粒倉を出ださずとて、直談の高きが飢えにもまだ高く売らんがために、倉の戸をとちて一粒をも出ださねば、まづしき者は飢へにのみて瘦せ疲れ、(以下略)

と述べている。これは『可笑記評判』巻二―一「天下国家の、大盗と小盗といふ事」の、

今の世には、わづかの不作にも、飢死、乞食、ちまたにみつる事は、商人の、うとく成やつばら、大分の米穀を買とり、市をたて、しめ売にするゆへに、手前に事關もの、直談すこしたかけれども、早く求めたき故に、直をつけあげて買とる、その利潤あるをよろこび、金銀大分にもちたる奴ばら、我もくくと買とりて、をのづから直談たかくなり、すり切の貧乏人どもは、これをもとむる力なくて、飢たをれて死する也

という了意の批判と共通する。

このまま浮世房の米商人批判で終われば、滑稽卑小な人物から教訓を語る人物への変質はここから起こっている事になる。しかし結末ではやはり浮世房の卑小さが描かれている。浮世房は、米問屋の亭主が「米が欲しさに啼かるるものであらう」と述べたとおり、一升の米をもらって引き下がってしまうのである。これでは浮世房は本当に米欲しさに教訓を述べた—もはや教訓ではなく言いがかりであらう—事になってしまふ。つまり浮世房は、もっともらしい事を述べておきながら実は米が欲しいだけであつたというように描かれているのである。

右の話は、かろうじて結末部分で浮世房の滑稽卑小な人物像を保っていた。しかし結末以前における浮世房は、米商人を相手に堂々と批判を展開している。このように、浮世房は徐々に『可笑記評判』に見られるような教訓を語り出すのである。

確かに、巻二—四の話の中に浮世房を絡ませようとすれば、右のような内容にせざるを得ないだろう。浮世房を米商人とし、失敗行動をさせるような話の素地が、『可笑記評判』などには存しないからである。

つまり了意は、実践が困難な材料にどう浮世房を絡ませるか苦心した末、浮世房を教訓を語る側に回さざるを得なかつたのである。

同様に、巻三以降の話題は浮世房に実践させるのは困難である。そ

こで了意は、巻三以降で浮世房を大名の御伽衆とし、語る側に回らせる事で、かろうじて浮世房を主人公とする構図を保とうとしたのであらう。浮世房を主人公とする教訓の物語化。これが『浮世物語』の一貫した設定である。

おわりに

これまで考察して来た所を整理してみる。まず、『浮世物語』は『可笑記評判』を初めとする教訓的仮名草子と共通の話材を多く持っていた。そして、浮世房は『竹斎』や『他我身の上』などから人物像にヒントを得、教訓的話材の実践者とした。滑稽卑小な主人公による教訓の物語化。これが『浮世物語』の構図である。

しかし、浮世房を実践者として行動させる事が難しい教訓話材が出てきた。そこで了意は浮世房を御伽衆とし、語る側に転身させた。この事により、浮世房を一貫した主人公として保とうとしたのである。

したがって『浮世物語』は、教訓を一人の主人公の滑稽な物語として描いた点で、新しい展開を示した作品であると考ええる。

注

① 『浮世物語』本文は、新編日本古典文学全集64『仮名草子集』（小学館、

平成十一年九月)に拠る。ルビは省略した。

- ② 卷一・二と卷三〜五の浮世房が分裂しているとするとするものに、鈴木亨「仮名草子における教訓性と文芸性―浮世物語の構成をめぐって―」(『島根大学論集―人文科学Ⅱ』)、谷脇理史「浮世物語の論理と構成」(『跡見学園女子大学紀要』昭和四十三年三月)などがあり、一貫性を見るものには、前田金五郎「浮世物語雑考」(『国語国文』昭和四十年六月号)、野田寿雄「浮世物語覚書」(『国語国文研究』二十四号)、松田修「浮世物語の挫折」(『国語国文』昭和三十二年五月)、森耕一「『浮世物語』の可能性―浮世房一代記の意味―」(『近世文芸 研究と評論』十五号、昭和五十三年十月)がある。
- ③ 『可笑記評判』本文は、朝倉治彦『仮名草子集成』第十五・十六巻に拠る。ルビは省略し、「ハ」を「は」とした箇所がある。
- ④ 「大妻女子大学文学部三十周年記念論集」平成十年三月
- ⑤ 『浮世物語』と『可笑記』の関係を指摘したものに、前田金五郎・森田武校注、日本古典文学大系90『仮名草子集』(岩波書店、昭和四十年五月)や谷脇理史「仮名草子作者の構想力と表現力―『浮世物語』を中心に」(『国語と国文学』第四十八巻十号)がある。
- ⑥ 『梅草』本文は、朝倉治彦・伊藤慎吾校注『仮名草子集成 第二十四巻』(平成十一年二月)に拠る。
- ⑦ 『他我身のうへ』本文は、早川純三郎編『近世文藝叢書 第三』(国書刊行会、明治四十三年九月)に拠る。
- ⑧ 『竹斎』本文は、前田金五郎・森田武校注『日本古典文学大系 仮名草子集』(岩波書店、昭和四十年五月、寛永製版)に拠る。
- ⑨ 注①『浮世物語』冒頭解説などで指摘されている。
- ⑩ 松原秀江『薄雪物語と御伽草子・仮名草子』(和泉書院、平成九年七月)